



2913
29

特

昭和九年
七月六日
東京

貞操婦女八賢誌第九輯卷之三

村田

東都

為永

春水編次

第五十七回

齊尼計得り妙智力
一賢露頭る後河袖

余は復為羽玉のあひぢけ死は形勢不孩きつ且怪とて
開らるれどむすびもあへ毛須史呆まて飛たりしがまかり
不飲の由若るれがか介の前不我も考りめん身は去る後
さ女の巾後密をと宜少くお由ぶのを後念人懐ひ後
命もあつて首支とんとあつるふ今もいふお舞の尾と

登てはふるまひの物もどしと結り固めて完承とらうち然と
白癡女のまご惚らむや慈に仔細と言ひはせ膳の長と
見えせん吾侪ハまいた衣の後室有んと言ふものも女
ながらも老の赤と再身みえんと遠年以躬方と集
め時と待つお家の厄と外是なり今や功成時なりて
遠秩又山小躬方と操へ義兵と揚んとありつる都也遠
八代がと言ひつる傍と信と兄返すまへ八代是れ不致と
吾侪日外亦華村にて年月と修る小搦捕と種并活まを引
るる折しも角根とのりふり愛のゆふに輪と折破らむる
逃まへ一州一名の花御が懐みせし密書と洩らむる將一
お母の厄公が秩父の路小楠黄とつとまると邸奥あつた出
しと新出する返籠あて日らと強念表より討隊とて討
らまんとある文休ありありも描きとまのこをを教ふ
おひがけありと老をよて角根との長と人の首ともけらむ
まへあまらばお由さん小も對面してのりくまといえきりあ
良妻の胆ととも教かむやと開知おおと定めつと先づ
秩父之台むり厄公の拙と索負めて是れをのりとまら
あがりしよその時厄公の直人あり吾侪も岩鞍奥地が今も振

昔のあまぐさの縁をとりあきしは泡々物のまよふ由と
言ふるは賢女の穴えある若くて渠も又孝侍の家小者縁
あるべし女女多うとい俺が法力あてえきりあされは
お由が爲おつり箇根と云言ひやて渠がをとりて是よ
俺まご做さざきやうありと實ひしは遠くあておの
及びしと云ふと女への引とて今八代よりいふ渠まご
さる遠家へまゐり孝侍の太右衛門の後室よりといひ
らうと典物ちね馬羽玉が公の裡とも撰りえつお由が
根も由試しえし典物が奸悪馬羽玉が陰謀お由処女

が貞心を養ひ纏大槩の象せし又俺が實の名とあはし
遠くあの名長物するなり典物といひ馬羽玉といひ又その
戸塚大六が是まご做し積徳の仙智不足縁の力をあて
吾儕の縁て知りさうり人程目新お見しうしお見子遊ぬ
天の眞罰養兵と揚るをちねお見づ侍等の罪と責
ちねお見づ縁の賢女等と若しあはし被ひとせん細六の
何と云ふ所を放く大六と結よと辯の中より一個の仕若
か女の尾の侍等の裡より忽ち躍り出用章あまごめく
大六とあきんて索とかるあをりめく積ままあまご保く

鳥羽玉のや一生懸命余ども奸智小園する悲の人又
挿へんとさめる八代かまて潜り抜け傍小在あひ元
桶と国燧程の中へ投込めば桶の水小炒の床のわらわ
をのこさあがり家裡も暗むむらりある燭りのうらふ
ままきとさへひらりと死かりつて垣とらりて逃出ると逃
しめドと八代が俱小逃んとさるとさるとか毎の急小り
禁め八代渠の遊ふ小及び老をや悠くまをふらうとるうの
鳥羽玉のころ典物由糸の嵐小美あふぬと渠あひ能あ
若もありまがも柄小選一わけとさるとしてとあひく八代が

あひく傍小大六と縛ゆる侍引長う那細六と教え
合せ你の目外夫にありと辯とかくさへ細六も驚ういふん
知いそのおの旅の女中で在せうと言ふとお女が引きた
八代あいまご報知さるゆへ不審ふも由理りおね渠の由
うねて知るか理喜か友が従者まで筒振とのりふ仍りおね
か乃の大厄難と救ひ一功あるりのあるが男女の約と良しひ
つ遠次郎と索ね歩むと渠が伯母ある老女と俱ふ備の難
が不侍ひつ今日の侍由あ連さるありと従ふ小八代是とふ
疑ひおひ一首級の子さ長ふとめて悟りのころおねか

及が志多死と最終バ〜おひける遠時まで由か由か
此然として居るしがお家の系不親と改め吾儕が
知らざれば那典物か所解と偽やまうと疑へど由止し死
院授のあうさるより現在を良吏の能言款と所家ととて
月の系不系つ〜月日と送りし俺身まがう不言ひ甲斐
ありと今尾公と八代さ家の町人おままと知りしらん是れ
我を獨り修けりふらちも心かせげば何年吾儕不典
おと討ちの役とおん解し〜ささらば兵今より〜
那処不討きて怒と教ト作り〜とひお女不怒て

孫の公彦命るりながら脱不簡ふゆりる事りかの典也
と討捕るべきも案ハ最子做〜お死されば取返さへさう
もろ〜憐れいかにして過あ〜あり事不者解ある賢女
八名別ありてその一個とお格と言ひ又お及といひま格といひ
お安といひお竹といひは八代もその一個めて脱不七名あり
けりお你も及その一個めて脱不を島の高依仏よりし
八解の孫院の化身あり 命が你も今より〜とて是れ所の家
不仕ん〜遠い勿論のりされば危若君と光景若より
夜一室ね獨りるおあり是と你的身不若て晴の能言討



殺されよと言ひつゝ侍も不齋一ありし様松も死葉不
際ありする寧ろ楽晒の麻衣ふかみ下晒の中帷子忌込の
襟子種さへ添て卒とてきしゆせむお由はらうと死と下
至那獨と手不更てお死きつゝ叔言ふやうせふ飲り死
俺が身の素性おおふ若縁あつのこゝろ八女の一なるうと
あつて眞加ふ余の獨りの最者侍のそのち下ゆきと
垂深と做しと死種とどふ首尾より付おるやせむは身と
生涯所仏お仕えまつとせんと思ひしとどとせりうとて死
お不周あつりしとくうらひ卒と辯くまのこゝろとて死由と

りんおん取不る者一旦仏お推けし名あまごぶ由とりんおんお
獨の衣と添て今より袖と改め名長侍らんはま
袖とぬされよと忽地取つて怨女の本性お身の尼も
八代も恨不盛ずるその中お細六紀へまお妹とてま
そのお辯お死てまごおひおまらるるりとて久八代さぬ
あん知しあまごん那神宮屋あつお袖お女がお持さぬと
女子と知るお祝の辨せし良妻とておひ依る一念カあや
その身お女おが又おかり命と墮せと七世のお持さぬ
の枕とおあつりしと出つ言ひしあひ良妻とおひ是まお

骨柄金の遠縁とおどろき一は善の箇根とせと其計
策と叫見示一細六その旅の伴商ふかの大立と引き
あのく并処とをさし出ける

第五十八回

八女俱促しと豊島再栄
結局稍全一八社の縁記

体験家録典物の泡々物と害せし後い百般自己を
まゐるふ近以後又の心愛ふか毎の危が揃ひ一
速くす物一徳倉喜入内を一とれ今日や返捕の法
あつう難日や討隊の討けんうおれよと先隊ふかり比

るれとさられしと是と世の小にとせがあひの怪ふ能は
徳倉よりの返書と後しふあひげあく大石殿のその後室の
入来ありてか由と長くむきあるあを渠と徳倉へさうあ
るが縁ふつるぐる俺が身ゆへる急うるべきやもう
るあれ怜れれられバとかの鳥羽と後室ふ副てか由
が白身入るさう一とるうり那処の首尾と奈何あんとあひ
づけて心もあらうあさるおれも逆敵りる鳥羽とが
しげふ報知やう大石殿の後室といひしん寔にか毎の危
倉よりの返書と由八代が横たあ一後又へ門をさし

泡々脚と敷せしり入渠等速くも知しゆ人か由小僧と
討せんと言ふ那処の形勢ハ悠々あて吾侪も捕へらるべしと
僅小逃まじ飯すりと息つきあふ若狭るあを遠く計置る
と典わが一回ハ作天せしが又是不敵の曲若人思ひあて冷
笑ひ小女覺あるか女の尼が俺が針界の裏とうき遠地小
道家もこれバとて丈の知もする女の様智あは衣袴の一
つに威我が配下の民ある小悠る時の為ふもと俺ハ猫の
姿とあり一息をある若ともとて然してあふ枝持し居けり
その若者と與集く根を束するお舟の尼と搦捕ては柄小

せんと鳥羽玉来まきと雫のつ梢樓小走せり落てお若と
まきあを金、法螺貝らつて吹鳴せの忽地家の比方より吐と揚
る緑波の声と俱ふ新多の兵等構目うけて挿圍し舟
撥とさう討する遠形状小典わらうを強さつ強まて比せと
儀とつんあうまて不威是配下の莊人の歌小交りて考せ味し
るれ典わ声とありまて汝等日比の思長と忘れ歌小障
りりのあうると言ふと死考年の中よりあまき出する五
人の勇婦是判別人あるまお梅お乃ま柳お安か龜の立笑
女ありけるが渠等といは秘不流より遠後又根小束じとあ舟の

あま 尾が速くお初りておの心契お縣ひ番さ今日の後おいさしあり
そのと死体の五段女の逢ふ那方と見えあきつてあまう岩盤
典物は一々の莊客のこゝろ泡々物に領長あつて你泡々物と
殺害す一箇おと横成るまでといへとも争ふ你お佐拔までさきを
お斎の尾のおくおこりて俺們五名が利害と説てお由どの能く討
の残らざ物と做さるるのさうにその酔のちや醒るが首と
後せと喚つてつを根お踏ふとち驚く既お方さく依る
あを殺さるがらも道お曲おからしとおお後ひ是なまといの
莊客ともいさきつてとも傍おお是とて日以技おせし腕股の雲

疾くぬ系と跡教らせと下座と對ひて下知るまを初しよ
その腕股する者ともい首お做しつてあまありとかおの尾と
先お立お袖八代お人お絆多の首級と携へつておりおし
其中およお袖の遺恨お堪さうけん我に對ひつ依とえん
奈何典物今更お言へて由その身お死つてん良まをうり
男たる清守教とも殺害す一当家と横成るまでのおまは
おの榮利と見んおお不後又の跡お構籠るお夜の尾を門
五せし言ひんこころお大衆人お備もお清お府おありてお
又お袖女と更めつるおなまをらおの一手お柄おをおおとつてハ

解人の罪人我身あり又良吏の継言故吏と名をて務員
せよと言ひて曲物余まぐろ小怒の面色血をうるまを双の眼
と見えきて強急やに情や悠くあるうへは罪及びて死す
せけん承りて基俺こそ下毛虫原申山の悪小佐む山猫
若死の二子ありと毛作といふ若きしが強急方の討隊の
為小俺が緘鼻と破らまてより飯小湯が門生とあり終小
渠と毒殺あり又泡を肺も殺害して遠家と横伝へつても
お家の尼さん解人せいの元末強急小由恨あまは終ると
より大入で遠身小威勢つきうろろ人骨伝家とも攻亡し

然と轂トニッあは生涯榮死と究りんと若ひ小おもひ
大を女と死の小女見えめて終り切らる躬方の若き人討
とらましを安うね能令何極捕圍むとも俺小奴の高
がそれまふ不おせし一おあり遠いある月不末結山あり天
より居ると松ひとしりし利縁の縁ありて是所の家と再良
あはあて惚らぬ重宝あるうへし今你等圍と解て引退
うがまをより備もよ利ひ做んとせはまを引裂抜へまをと縁
中よりさる縁の縁とわひろげつあまふとり卒と言ひつ
烈家ん遠形坊小お林等が供の月外六浦ある縁戸の危縁

そのおろしも様おせし終の終の竜と化しつゝ死んで救ひと
おしとくえくうの是俺們が凡眼のしきと及びぬおめては終の
基の山麓めて岩敷山麓麓しと遠曲おが捨ひしりと
あふのくまの山室と能ふ火られしうくうの道ふもともちね
睨へつあつておへうまが中不もお母の尻いらさうう強けの体も
あしうち含笑つてやと曲おれつは終とお持るをてべとあひ
し終お終まで不多終とものつて大老し不終不遠りも俺とことか
にわたりうる悪うよふおくとまひつてもは不終文と唱まひぬ不
終や二足の山麓おひとの昔を竜と引りて来りて曲おが

糸お揃くと是れと終る終もあゝ昔を終と纏より終破りて
終まおつる少女お作終り裏つて曲おがおつる終と終
ひたりその終をとめりて吾終日外終七がぬお終今の最
終とさぐん終とお毎の尻の如智力あてこの終お危窮と
救りも終又の源お休りまてより尻をさぬの教ふよりお
終まがう不武終もゆり幸と考止八女の一終を終おはる
てふえどぬお又う去終失ひし終の山麓とたぬうと言ふお
終お終お終も少女とおひ由形してあしりの終と終おれ
こればえや曲おが死おれひ見ぬううと言ひつてもお終て月



ありてはの残黨汝が婦女子の分際とて及びるは企
做し世と強がも白痴者俺と誰とらあひぬる外骨領定
正より我大任と彼らながら愛お入るとさう向しり程と後
ふ似れとも道次河羅の機ふありて教養あさんとい
愛と愛りがりてゆくふ思ひを自ら還派あさんごあふ走
對ひしと知らざるう穢婦女首と後よとあひげける死管
从の辞ふ不守女情やりをかふの由愛女あも手裏のあ
らふその中ふおたの向よりお袖お龜が誰と頼ひし形勢と最
美あしとあひしふ日以明ひし定正とけり忽地暗く出たや

熊言定正吾儂ハ少門の林徳官浪若典振が女見ある遠
女ありしとん忘まうう為あ少海の松系あて只一封とん
ひしと你が運のそざるとうう悔りしぬるは情さん忘らるも
まうまういふ今振らざる小自己うら名若て愛ふ出さるんあう熊
と封あむる真助とあへ争う進さん奴と文よと書らうつ
他も押らるる破りかゝる定正九也衣也身とかいしヤレ後て考
トよい女言ふよりあり思とあまあてまづ所さやまこと言ふ正しく
女子の声あてえりの秀声あしきれば是れと紙るそのひまふ
那定正の眉深小冠ぞ一境とあると直く足れば齡も四千

仇ふるさつとあかぬ人這おん境におりけりも定ふぬの川原
あるとま考ふめぞかたふれせん縁縁が例おん首級とよか
て恨と情せよと情の辞ふおたふ飲び飲も恨も是れ
伴の境と懐ぬあてと刀さうつおさむあてふれ笑し一気お
徳てい途小遠恨いあねど尚も親をと縁づんとも小考治の
息女光姫君と扇衣の表君なる親身ぬのわん白君ふされ
と死君の親でいばは後もおん更あつて死すこのあふお女へのあく
勢び管従さあひの跡君ふ光姫さあともいせんや 尚家の西月
はうまけねが姫ふもあけさうう人後とおん更いこさんと縁と
丸くおさまる折一由那鉄六の細六の伯母の老女と恨俱ふ
走りまゝく報知りや俺們の去る日より 杖又の跡ふ衣君せ
らと縁一此身と引揚らま光姫君西君の川側近く
さうおれふ光姫君とせぬひいと及びさう八舞の那跡
源院仏の灵像の忽ちとて帰せぬひ以承ふおれさ
厨子の程ふ安をさうつ在ると兵今測らま見せし旅
はるしと知せまらさんとのあま由とわつらあまお女の尼も
八舞女も傍せし山吹も佐公程ふおれ下ける徳と後旭君丸の
そつはあかとおれさう光姫又管従さあ日あまて雲合ま生ん

仇ふるさつとあかぬ人這おん境におりけりも定ふぬの川原
あるとま考ふめぞかたふれせん縁縁が例おん首級とよか
て恨と情せよと情の辞ふおたふ飲び飲も恨も是れ
伴の境と懐ぬあてと刀さうつおさむあてふれ笑し一気お
徳てい途小遠恨いあねど尚も親をと縁づんとも小考治の
息女光姫君と扇衣の表君なる親身ぬのわん白君ふされ
と死君の親でいばは後もおん更あつて死すこのあふお女へのあく
勢び管従さあひの跡君ふ光姫さあともいせんや 尚家の西月
はうまけねが姫ふもあけさうう人後とおん更いこさんと縁と
丸くおさまる折一由那鉄六の細六の伯母の老女と恨俱ふ
走りまゝく報知りや俺們の去る日より 杖又の跡ふ衣君せ
らと縁一此身と引揚らま光姫君西君の川側近く
さうおれふ光姫君とせぬひいと及びさう八舞の那跡
源院仏の灵像の忽ちとて帰せぬひ以承ふおれさ
厨子の程ふ安をさうつ在ると兵今測らま見せし旅
はるしと知せまらさんとのあま由とわつらあまお女の尼も
八舞女も傍せし山吹も佐公程ふおれ下ける徳と後旭君丸の
そつはあかとおれさう光姫又管従さあ日あまて雲合ま生ん

